氏　　名：	髙橋　陽子
学 位 の 種 類：	博士（看護学）
学 位 記 番 号：	博看護第１１号
学位授与の要件：	学位規則第４条第１項該当
学位論文題目：	プリオン病患者における日常生活動作と認知機能の経時的変化ならびに特有症状と合併症の出現時期 ～1 施設における死亡退院の診療記録を用いた後方視的研究～
研究指導教員：	谷本 真理子
研究副指導教員：	李 廷秀
論文審査委員：	（主査） 米山 万里枝　（副査） 廣島 麻揚 （委員） 西村 礼子　（委員） 鳥田 美紀代

論文審査結果の要旨

髙橋陽子氏の博士論文は４名の審査委員によって、書面による審査及び口頭試問により厳正に審査された。

本論文は、プリオン病の病理解剖および病理診断の体制が確立している研究協力１施設において死亡したプリオン病患者 25 名の基本属性、日常生活動作、認知機能、プリオン病の特有症状および合併症のデータを 2 次利用している。日常生活動作と認知機能を評価できるプリオン病重症度尺度の一部を修正した尺度(MRC Scale)を用いて、病型別に初発症状から死亡に至るまでの１日単位の日常生活動作と認知機能を点数化し、機能別の維持期間の比較ならびに特有症状および合併症の出現時の MRC Scale の得点（点数範囲は 0 点(最重症) から 20 点)を記述している。

上述のように、プリオン病患者の診療記録を対象とした1施設のみの研究であり、IPDの症例数が少ないこと、症例の症状などの観察や評価内容に対する職員の診療記録の記載が標準化されていない等、症例により診療記録の質のばらつきの懸念は考えられるが、対象施設は、プリオン病患者の症例数は少ないが、病理解剖例が多く、診療記録の記録内容の担保およびプリオン病患者の経時的変化に関する重要な基礎情報は得られていると考えられる。さらに、プリオン病の専門医2名およびプリオン病患者の看護経験年数がある看護師4名に、本研究結果を提示後、病型別における機能消失の順序や特有症状、合併症の出現時期は臨床経験と一致するという回答は得られている。

今後の課題としては、対象施設および症例数を増加させた前方視的研究、および本研究が示す患者の臨床経過を踏まえ、家族が直面する課題や負担に対応する支援を行うことは、患者の生活の質の向上に不可欠であることから、家族への看護の期待も求められる。

しかしながら、本研究は、対象者数は多くないが、貴重な症例から得られた研究である。社会的意義も高く、「看護学博士の学位研究として認定できる」と判断する。

令和７年２月６日

論文審査委員（主査）氏名　米山　万里枝